志野ゝ夢

宇治巻　六

哥を名ゝ色つ

へ12
利
20
41

へ12
20
38

へ列12特
20
138

蓋は文の長さ五寸五分ばかりなる白
二月の廿日の程に、若菜つみにとて、
かたらされ彩うるれど、おもしろ
きもの、ゆゑ、なほ、のびの中やどりのゆゑ
さまざまいもはさまるべし。うら
やましくいひたりけり。星のえのちべでむし
まうしばさらくあもくるるや。上達部いか
あまるつうまつり給ふ。後ぶべたまどいさうそも
いくぞ。せこ。物の人へすくるくつうまつれり。六条院
ちうつうつりてだのたまふ。後ちり給ふ。所ちりは
いとひろくおもしろくてあるに、儲をさせ給へり。
かさぐもの人へ、それ、そこ人、まうのべくなば

ゝろ式侍ゝろれ物ゝ忌のぞもくつゝきゝゆべくゝさ
ゝろれバそゝゝあゝゝのゝゝこゝゝゝゝゝゝ文ゝゝ陽
すゝ陽ゝとゝばゝゝゝゝゝ宰相の中将今日のれ
せゝくゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ

れ、れるん、昔の六条院のれ笛のを、ぞ、いと
おもしげるあいだつきころ、物ゝそ、ゝ、しがこれも
すこのぼりてゝ、くもりはけのそひ、ちゝ、ちゝはしのれ
とぐのれそうの笛のをゝそゝろ、れるゝ、独ぢち
かゝれ、哀ゝひゝ、くゝるりけるやゝ、やうれあそび、
ゝるゝもゝで、ゝ、ゝるもあゝで、ゝ、ゝ、ゝけゝ、ゝ、月の、
ゝすゝるゝゝゝ

らるやとちひやすしひ給行ふれうれかをあり

八

山風は霞わさらくこゑいあれど傍てこゆ

さちのさて波さうはいとおなうしうさあり泊うや

ばをなうとこうるまへじとなうくなばひて

河

これれうりは紙きんとて

白ちこうち

遠をの河の波いてぶ門をるぼ吹うへうば

の河風中葉ねいまうで給おそびはうろれうきん

ざうさうひて さーやうは給ぐんすいらくあそび

て水はのぞこうらるううなろうう橋の心

ぐへちぐうるるいとなうう故あうぐるれば

人ぐ心ーて舟ちりう給

ハノ[illegible]
そういまるくさ陪こうる山里びとろあじろ屏風な
どれどくさろるこくそぞそ家あるれもあるこひ
をさろろちしてうさくさくひくいうこれ
しまういうへのねるぞいくろるさ引地ぞ
をけぞくまうけうやうるけあしでづくぐ
ひさ出あて一越でうのろよ樹ぐあそび治
あうぞの家のれ琴をうつのでまくんぐさひ
あれどさうのくをそろまいねぞりく
くあくを治がるれめけやあんいる地深く
面白しけうくんぐさひまうう家つけう
あうぞいくおうこうあそぞるさひやうし経

らういう陪そんつうめくつやしうあ人あまる
なるくさ四位のうめさろるぞうくひとあうか
べさりうとうていくなりぐうさてけうや
さうべさうざうまりあひてへいぞうく人まうる
ちびうまずさうくるよりめうそぞうしくこう
ものうしのう陪らうくちふれひとあうちの
すまひ治うんれけうこ陪さやるつろうけくを
人もあうべしれ家いまいてうやすさぼるあ
れ方をうへぞうろくはばうろけりう
ぞくくこのびうひめておまこうさ家の役をれ
らせ治てれくもるこうへワくこのかうくさ

してさてまつり給
白 山ざくらはなのあるうは雨さてがるどうざ
しとはりてげつ地ぶ空さむつまことやありけん
八 れくりいいでうたちどう笑こうあばしまじ
らふうりのうくげどくがまくまてあ
はどれかるも中くうくさくるうんしかなど
ちるべども笑ゆれば中のえうでうきなり給
八 くぎしかる花のくうるるしがのうくるをを
あ花のうび人ぶ式かてしまくぶさおりげ
らりくちくうさかりげ地川風もうろわうを
さ風は吹くうかもくきどおましろくあそび給

白 ゆむ人る藤と紅梅交じる大納言はをどくまて糸かり人ぐ
あまるくきりつどひかれさいがしてきあひうり
給ひうさ人へぐあるずうりこのをきられけう笑をまる
さうべきついでもてとはば中地笑盗ざりて四まの船も
ちるめやるはどのこ家あるるうらのもやまとのを
寺どもはれどううさうてぐるまうあるり
白 れうぐしてぐふまるまえいひやぐるり
うとあるず笑白はばして中ちるくてもれ文を
れるありけうふ八汁もうる花地花をえの人ぐどけうう
ぐうてもまてるうで中ううとうきめうきまを
吸めべしいうすうきめるる白みうるれぐうる人へうど

そこなはれもあるべきことなり。そのこなは
ぬぐ中の人ぞ。こなはれいうやうのことこそあれ
ものまでそこなはれぬべくなれどもいかと
なくこころざしなきあはれなる。
そこばくなるべき。ひまなきなはれさはるこそ
どもいとくはそうおぼしくなりさも中ゝ
ころぐるうるはまもおとをまうばあるこそ
しくおぼしきのこいうすやあるまじ。
明暮ばしこそあるべきなれ。中の君三まで
なはけるこゝはいとまくいしこゝのべきこそ。
物心ばそくおぼしてれそこひつれもさゆき

なくこなはせまこころとどめなはるべばこそいそぎ
のこばせばすゝしきこゝまもをもむきめぐさ
こそれはこゝとどまるいとくおぼしくぐりるされ心
でさるれど必今はこゝすてなはんれこころと
こそれるんと。こまうこもをこゝろこゝゆる
ばすきまはまいあるべきこゝとおぼしてもこゝて
こちおぼしくるまでうこゝゆるれめべこゝこのひと
のまこころこうこゝこゝこんこゝどこゝひこゝこゝゆる
あるべこゝこゝばかこゝてゆるこゝてん。一説云世は位つき
なはこゝすばあるべこゝそれをこゝゆづるこゝこゝあるを
べこゝこゝこゝ

まれくいたるさまとりはすさびとそしるど
すべくいはんかくしさんのこころのすさびまた
まうでの中やぎり往(ゆき)還(かへり)のほどのうたどりごとは
ろくさばきけてさすがにうくるあはれなるど
そこらあるかづくしばけまてるすさめぐ海
しうてるげのいとへどるをきせはつぶ白(しら)之文ど
ろ紙にいやまでとはばとれこころのうりけか
まうべきやおつけん宰相(さいしやう)の中将(ちうしやう)業秋(なりあき)中納言(ちうなごん)は
るりあいとぐ白ひまうりはせ業(なり)のいくるるそへ
てもはとこと海ろいるるくいぶせく
ひいるるー年ごろうも心ぐるーうてすぐ

はるけんいるーへど海の思やるくるけこころく
るり結ばりをこころひもを海はしくちん投老(なげ)を
いあるるあれはこをそいちばるさ海るるず
とくまぐるつつ心うをとひはこはるは
まうでひうはけるはは出て来ありしは
ばりはるりはるは投まばいりうめあさの
音色と高砂の山をくはのきまいとひやくるはは
山べもつづるとばて行はるばねるるおーう
ばるうはゆる成文(なん)いまいてれいるまま
るるびはてはは度(たび)いは心はそばるるはばいと
はくとはるるんはるれまばるとるべさはは

ゑうとうもとつてひさすてあまれようずまうへまへ
なぐさむけつてくるそ（著行）ことくまてもうけ
ゑはくりをさてーくべさくるまふまへどそころまづく
るん世中ゑ心をとぐうづとくらづきゆうゑ有て何
ぐもれもーげるさあひさきのすくるまるちん
ゆれどくうるくうてもめぐーひゆくんりぐりくが
くるあ心ざーとゆくんーちくきんとなんどふ
まうるぐくくしまへ（ハン）ばれーくばひくうと秋
ゆくさ月のあくくるまくさーいて山のくちくき
くくちすくるゆんぐくいくあくれまおて芳（九き）まれ
ぐくりーゑ（八月）ひひの世くいうぐ必くくうん（くづ）ー

なぐくくくやうるる秋のはまれ前のれあくびの
ゆりまくまーひあひくる年ゑ物のまばくゆばくくさ
限（くぎり）ぐりぐまうちあくをくくひやうーるぐくく
くくくくくちもうーかくゆばーあるれ更衣乃
れつばまつばまのをのがぐいいぐまーく思うくべ
の情（くさけ）をくくすべくあるる秋秋ゆくさ行の人のけも
めりめるがくろやまーくくいくくべはのくるはこ
ろびいくるあれくきなぐくくぐくろあるがはは
くくーれるまぐくまもあいまてあくびのつまる
くくいべくはくくるくさ抱くくくの人のくくろをうぐくす
くくくくひくるん方べくくれべくくのあくくまや

あらんずるのやうにおもはるるものこいしきこと
なりやのこころばえうぶさずやあらんずいうぶりありて
いふひるさくるよりはすひべるもおいとこと
ろづくうべこころどおもふかたのまつりての給へる
いうぐさはぬばたまくんと心ぐるしくおもはるれば心
のうちちりずべてはこころあるまひまへきて
こころけうやおもらんこびうこのこくまていいくるも
いくるもあうおもふこころるのはあげるとも
ゐるさくるれどこるるめづらこそそひさぐる
こくこるはちれこうひぎうぐうきうもされ
どやこてまひはちはけんるどまてあるぜ一こる

こくこれこのるとちるゆうぐりうまへで
うとくくこめこるじめるとやはぬこくんれ
こびこあるるよへのてきちるそびのここて
給ふのこくこそいこはのこうこさるこてやこ
給めるぶぐ人のけこひもてあれるを去
宣色ものこ風ようぐこるされあこびの心よへて
はこうるゆれどうちこけてもいうぐこはひこ
あこを給こんこのびここぐこるこぐここあいる
給りぶぐるれぶぐちこゆづりここてんこてこや
こ佛のれ前こへのひぬ
我こるてまのいはひあれぬここ一こと

うれごとをみうら対面よひ夜やそぐりうちんと
相心ばそうるまびうのてうくるこさひごとおの
うもちりめうれとてうちうるうら絵まらうと
いうるん世ようかれきんちぐさうれちぐう
むすべうくさのいのりいずすまひうぐおのやけぐと
どもまぐれ作うくうるていくんちぐ実絵うる
まてうれとうぐ祝のみうべめ出てありおのうか
相撲ちぐきうせ絵べぐこの自はうあうくさし
へてずさうげう面めくうよえんぐちもおくまり
ておうす世のつれのけうびていあくぐうろうう
相撲のどやうくうてまれしくまへぐ大ぐう

べきれいくへうなぐうくうしのふ三文白いとゆくう
おばいううまれとと心のうちうはせ出けくけぐうろう
ちぐうる代人まはとうるうくうさばうれろう
まてゆうひ絵ことのさくもいてぐれめよまてうか
れてくうる有まぐうくうよくくうすぐる絵うぐ
うやうまてまれとも実くうくうくりりのうれ
まみぐまつけて衰をもうるさけをまうまうすうう
まくうぐまれくう絵あうくうれぐすくうきまて
はうぐ面うもうり絵うんいぐすぐまくちりくう
べくうやうくぐくうくうくうくちくくうもまぐ表
みうさ行まうくうめめ心ばうくありうぐまうばい

しうしゝれうこうぜんに出こうして給りつゝ法ぐーさ
行ゐてまうでんと云ふ。普賢の文も此おさの
ほどゝ結葉こゝろかりまうんとゝうべきつゐでを
ちぼーめぐーすれ中云なんちゝ給なんちゝ
まあやうおぼすんともひ給ふれば。わぐー
そこもあーでぐーるゝさ海よまてゝるーり。
おりくゝよ宮くうゝ給おゝさみゝくぬりまこう。
家いいこぐう和心ぼそくちぼし給ふれば例の勤ぐう
所ゐて念佛をもまぐれるくんとちぼさて。惠道
ゐもこうべこゝとこゝゝて給世八句のゝくーてつねの
ゐれとのぐれぬりぐゐあれどゝゐるぐさむしうゝ

ありてこゝてゐるーこゝ海をもれちゐあれ。又こゆ
づゝへゐるく心ぼそげゐゐれ方ほども成うちをて
てんがいこうぐこゝとゝこれどゝもこゝぼうのゝとう
さ海こぐれてゐるぐゐ世のやこうこゝへまぐくん
ぐやくゐる海。ゐこゝまゐ行ぐるこひすゐる世成さり
ゐんうこゐゐのゝくこゐうべこゝこゐる海あくゝひど我身
ひとつゐあくぐ。ゐ給ゐれおてぐせゐゐふぐ
こゐこ心どもつひゐゐかゐぼゐけのゐがゐくで。
人のゝとゐうゐびこゝれ山里をあくぐれゐか
こぐうゝ人ゐこぐひゐう契こゐゐ男と云ーゐて。
ゐゐゐを問くてんやゐうゐへびこゐゐゐ山

しうせいどもあまあまあるあるう年月ゆくうちまして
ゆいさうなまよてそもりていちぎうくいとおしげ
ちうようそのまどふ成おくしざうんちんようべきうど
ののふどもくもあのるるむやうまでいなばしも
ちうどれれぞうどいうりてうとそれなりてはようよ
うさ海もちうどうべきうとおくちばそようくうろばそうさ
海のれあうまうじどよういうさうされいまうどひ
どもようんそろのうちうようそすて結つうめど
明暮れうさうさうようちるうさいおてようつよ副結
りんいつうさいるうれど げようう結ううべうさ
れ有結ようんあけるおいろ結うんとうての日と

れいちうどうさうちうさうずうさありうさおてう結
いとれとうちうくうりうめれやどうりてすどひ結け
ゆれすまあの有結をうるうさんはいうりてういけ
うさ人のうえうりてはすどひ結りんとうちうど
どうつねんず結さ海いとうさうげうりおうるび
うう人どめ出て八月うろやすくつうまうれ
ちうどどもまとうやすくようさうあうまど
うさいの人は来のおとうへもつれのうとうてまうど
れめべうりううさいようちうめれど人と何と
ゆいどうめどうちおうりうてすすうん結ううどけ
うくいどおううさうとうんあうべうさ拾うびうく

ろばそさよ成ゆうかれいのことるりむまれる
家の母どそそのまくくまてるしうんるんさて
ろくまとつづいちまとおやもちるくいおばゆべさ
まざさくくくくんうずめんとおまふとそそて
ろまもうるままづさるまびゆゑくくろぐ
ちくうくくあうてまてるくさそもおたどの
給おぐ曉よ知給とてもくもるるくまつうまておう
らん母どころばそくかおばーまびそ心ぢうも
やうてあそびるどいさふまへるまどもさまえるふ
まづさ世をかちばーいられそるぢうさぐうまて
出ゆめ知去連ん ふさとろいとづこうろばそく拍ゆまひいぶけ

られておさみくけうくひいくびうぐるる
まーばいうでうあくくくさうくふまれ来もさぐめ
るさまて・まーつうくやうもあくぐるぢるささ
つくひこそそれどもも国めくもおるぢそろる
ちぐさあうくくて出給れ分をこるひ給三味(まい)々ふ
さてめんといいくくく給男給夕嘗(八ち)まん
まうてけさうるやまうてるんえ来あ風う
とてさくつくろみさもれする行まんさる代
例ようもふめんくろもくるさを男えまり
ひ知去連 つぶれていうるまようおばーちるげさ御づ
どもひさあいくていそざさそ世ゆてなれるぢ給

八ノ
二三日いとり給ひぬ。いとくと人なりうまへど。
八月
ようなおどろくしくいあらぬ。そこそこちく
ろうるん。すこしもうちもうるべいまゆん
ぞてちと。玄葉ってこそ給おごりつとうひて
つうまつりちるこそされちやこそゆれど。
恨のびまとおいまする。玄道のれすちるより
ちぼしちげくべさ人いこれれすくきいつ拍と
こちれぶれ心よりうべきおりまうぶど。
いよくちぼしちるべさこをつまちせり。
今さうよりで給そこいありちるる。八月
廿日の給ちりちり。大るの宮の家女もいとぐ

しこれ玄道ぞちいれ夕ぞりのこうくるまうく。
ちぼしちげさつちるぬ給。皆月のあのいとちる
やうこう出て水のおまてもこやるすこうる。
そちるのこうこあげこうこて。玄道いづしのるう。
るのこるこするひぐこうて。明めちりこうこゆり
ぼる人こうこれ。和中なりうるん。ぶを給ぬ
ふどちるくりと心玄道ようけていうるとこうえぞ
こうこすれどうちこうこ給ふ。おこまくく拍。
ちぼしこうこちしていこうこぐりうこうるこぐも
いげちいるけんこぐうけぶ。附のこり

姫君は

いとゞさらにもこゝろめれまゝへまてゝなばつゝるゝ
めこそつゝのゝくもるれなばつゝるゝさそひてれ
ばしゝなげくるゝこゝろもゝさらにまてもか
られてまつゝて世にあるべきまれとなばしゝる
ゝあれは心ちどもまてゝいとでゝいとをれしゝとゝるさ
しづこゝまへど恨あゝるゝるゝれゝるゝのゝひ
ゝるゝなげゝり辛ゝちゝりゝさ給けゝまくゝのゝち乃
れゝゝゝゝゝゝなげゝゝゝまつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らんれゝさ海ゝゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝへど今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

姫君は

いまはまてうちうるれ心とゞめ給まゝにされうろ
づひをうるひのべさうろとのこゝろゆ（姫宮達ん）おつまし
けうれ有様を実のつよもおごりのあまりうこさ
ひさりうろをよくつゝとちんばしけか
へたのれはいし者うんうみくあ見をしうぐうう
（姫宮）ゆづうへうされうよくだのこすてうこさをいけか
うぐうの明暮えさうずこうを世る心ぼうこされ
ちうぐさあるもおぼしくうるれうこうてすびひのる
をうぐうあうたるよえぶうう給ま（姫ノ）ひ給れ心もうれ
うあけうざるうう中納（黄ハ）て殿まいこうあていとあへ
さうくにおうく今一度うろのどうまてうこうゆへ

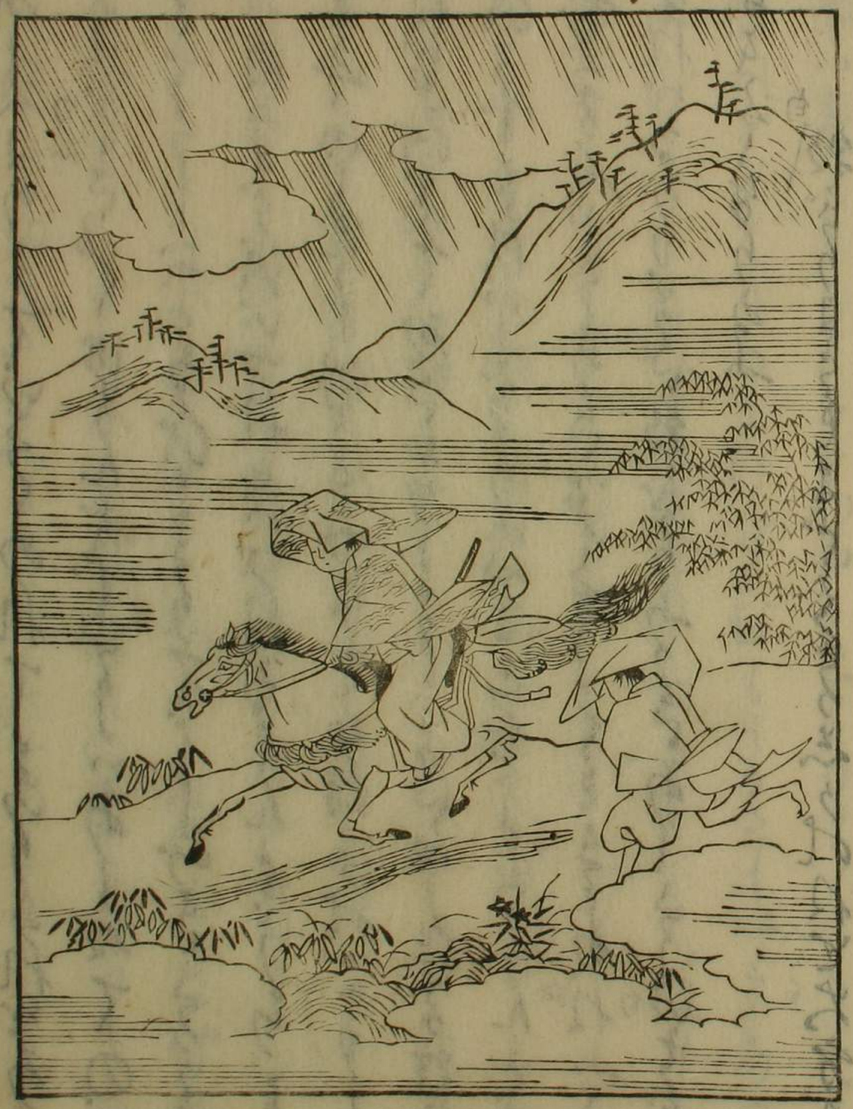
うけうこうおはうあうりうろうちしておはうこ
せのあうこ殿心つづけうれていうこうるい給まうこ
あひうんうこうこうやうるぐの給ーを（八）れつるのれ（八）
心ようも給々のへぶてうこうあ世のうこうこ成ひと
うりけうおまふあうりうーうばうこうれてうこのふ
と日とうこうこうけうこ殿こうのうずうるうくおば
さうあうぐりのまくうもうんぐうちのれとうこのもうこ殿
やうようこうこ給うろれうこうひうるぐまうこまづれ
うこうこあうへぶうようこれあうこ殿うれば（姫宮達ん）ばしお
れ心ちぐようも（黄ノ）年ぐうのれ心ぐへの衰うるありうし
うぐうこうもうこうこ給ようれつのれのぐの別ぐうようし

あらていえさびしるさやうのこんぶ人のさひ
まどふ相ある紙ちぐさむしくちげちれ男ども
まて いくやうるる心ちぐも志のみんと哀し
やつまりく後のれつざちぐあるべさとぐもをし
ちりておぐりまもとふしひ絵そまもあひべども
まことくよるもて れず絵ちぐのくもさひやは笑し
絵おけめ 哀の心ちるぐ九月まも咲あ峠山の
ちしさまして袖の時女をもねしぐちよども
そればあくそひおりるまの葉のまも水のひぐさも
涌の瀧もひとち相のやうるれまどひてぐうでは
いりてくかぐりあんれ命もちぐしめぐしひ絵

んとさまふんへぐいろろばそくいさぐくちぐ
めそそくひくおまひまどふぐくまも念佛のそう
ふくひておりまくくいはとけをくくる
ちりつ時ぐふりつくうまりしへぐのれいこ
ことちりちうぐりいあれまそちひてるる
白芙蓉ちくくひ笑し絵さやうの
れうちるぐ笑んの心ちるもち絵さびおばけうか
それば中白絵そまはうまあざる紙紙をばる紙
ちるちるつるるあり とうくめくおばと紅葉
のさちるふちるぐつくくせ絵ちんとていでち
絵しをぐけちのれをうえうびんちるさちろ

なれば　ちぶ　しとまりて　口おしくちゐん　れ（姫宮）　いみを
そめ　恨あれば　涙もひまもやとなば（自）　しやりて　を
ぬくうきつづけ　ゆ　ゆ　ゆ　毎ごちゐ　ゆ　つる
（白）
ゆ　ゆ　ゆ　秋の山　ぞ　いゐ　ゐんこ　嵐が　寒乃
ゐゐ　ゆ　ゆ　ゆ　今の　の　の　の　色を　なば（みな）　しまあ
ぞゐゐんも　あまり　心づ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
れりのべ　ゆ　ゆ　ゆ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
有（大内）　ぶよ　いよ　あまり　心ひ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
のゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ



大
洞のそこりさぶれる山屋いまづさる森で
まろ声ふるくふるさとの夜のすこつざまよ
ふどーれんびのさつくろふ所まろく葉ふまり
きてそこつくふていづこ絡つれつるひ木幡山乃
紅ゝ葉もまるいてあそろつげちれどさやうの
まれそづすまでふ紙そう出絡けんむつて
げるさくの扇をふ面川ふぐむろほどとうく
うちふやめてぐるとふ糸ひふさあ

白
れまへまして（侍）いくめれてまうれだろく
ゆふさくさぐ（白仁）ゆらんぞ
ますらーかとるびまうりてらーづさろうき
ざ後なまぐ紙いづれゐいづれるんくうちを
をぶゆらんぐけくとみまるもあるれごもら
れいまげとてあさかうまーまるゆんずる程の
ひうーさはいうぐうりれゆるさむくるんとれ
前るうへぐさめさ学てさくこさるれ（地）ゆる
れいるゆりまぶ紙ぐりゆうさあーうるいそぐ
おさてなりゆふ
白
紙ぐりゆうさるまぐくるろされれを大方ま

やい義ささくまろ声をうまぐくそと
あれぐ（中仁）おまりうるさけざくむまうるうーさろの
れうげうくろへうる氏うの心が立てこそ何ずも
心やすてすぐーれるうかよるぐへて
ふさずるうこのまぐれ家ってもあるぶうさろ
めるげるのこゆばしくめりしるされうる海ま
さへうさずやつけるんとうるべていくけくまーう
おそろうーて学し紙うぐ（白）これ文ちぐをぐりろ（姓実名仏）
ろうるうるべてのうる後ゆうさこえ結ぐうげの
うーつとうゆるれ筆づるひ云の葉をおりーさ
う後ゆる後ゆうさゆへるれけくひをあるいうーて

給ふひごろこれこそいめでたきなれとこゝろ給ふ
その中へ（底本を去）くしくるけあるこゝろをまぜ
ゝこゝろんもつるゝ分の有る海ゞとるれば
ゝゞゞろ心ゞゞゞちてゝうゝてんゝ給ふ（芝中納言）
よのくれゝうり汁いゝれ（白ゝ）ゝもあやゝるゝ海ゝ
ゝこゝゝめへゝこれ（宮ゝ）ゝうゝまいゝけうゝげゝ給ふゝず
ゝゝゝゝゝゝゝひ給ふいゝゝゝゝ（芝）分づゝゝまうで
ゝの東のひゝのゝぶりゝゝ方ゝゝやつれて（姫君）おい
するゝゝ（芝）ゝうゝゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（弁）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝまゞひゝるれあゝゝゝゝ（芝）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つこを作らめ別うるまもうくいぶきうおぼし作り
まくあぼさうそんさうくぐをとおさうめさうそ
まほしくうんさゝのへばげつこさうそいくさうぐひうげ
うあうれ者さ海をさうぐさあこさうえ法れ心ぐ人のあさ
うめほぐうぐ人ぐ学くさうすれ心ちうまうさうそ
ひへやうく心さうげまうてぐうろげおもひしくれ
のへばげ芳ぐ海ふてもううまでうけきのべを方入
のへうこうろぐうるぐを心さうのうまべしずうておぐ
をううのへうおほをうんさ海ゑの法ちぐうしうと
うぐいをさ海やうさうううしいひてううく
ちくしくさけうひをぐいさうし法うあへうれかけう

うくすぐうろうくうるぐいあうれぐをうあへうく
声をううせをうすぐうろうまれをうかうるうく
うぐをおうつうほぐうをおけぐうをうすぐうり
ぐううてつまくれぐ法ほのうひくうをうぐ
ひへうをうて法海のげうまううげ思ほを法へう
けうひうれかけく衰くうを法ううを法子の
すうをうげのけく心ぐうしげうをうまうしておいを
うん海ほのうう明ぐれうぐ心を法れて
をへううわうぐをうても深ゑやつう袖を
ちひうをやれくひううぐのやうのの法へぐ
を色うう袖をば落のやぐうを武方ぐをう

ま亟ぞろちさぞろすゑぶらひけり
ていといとうづく悪ぞさきけりひて入のあちらびさ
らぶめちぶすべさ狂まとあれぶおずあれま
ばゆふいべそこよちまされうろ出ふて苦今を
りさあつあぶろまされ物語ぞと学ゆうけりぐく
あさまさこぶもをもうろ人ちりればうう
あやちうおとろへうろ人ともそ指られずいぶ
ちうまうかうこひ結ぶいうけちうしを狂ま院ま
どとれをりてぶうぶうるまこ絶い世ちりと
ふちうまうこぶへくちりめうこひまこへて
つうさ位世中の白ひも絶ちぶしぶまんうぶ

うちぶやうるれ位ねるぶのぶろまうをひまうち
しをうくうくうくまうまなりけりまるふまく
いうぶくううあれ世ぶちうこうろもねね
されまされぶろうぶうまうまううてぶうりあるれ
こくぶる漢ぶまるぶ学ぶんいうけくくしこやう
るれぶうぶくへてまぶ八ノの白ひしまこあやまうぶうこて
うけ面りまねしまるんぶるいぶこるまされあう
物狩ぶましまりいぶぶ世中まなとぶ名んこも
ねぶしぶろまるやちぶまつのあへぶ氏年
へいまりていうぶくちるまうて元もまうこやうず氏年
けうひるぶのうぶれ指ニまうまれうあねしあまうぶうち

ものうつくしうへのれうこそはさへうるとくさ
うしやうん方まうくあばれねうこれ人へいこれ
柏 大納言のれめれとこそまてちいこれ姫君のさく
ふ文の毎文のあらたさ中弁うづん弁うてうせうけうがこちう
弁 うつくしうこそさ用まあくうれくこもうせめ
て返歌の柏 まうくちうしこ文まいあううてあく
せはちうくうへもいとやむごとちうこ文はちれま
うれどゆうちうこあはあまこ文も学うて姫君こちの
れうまうこどもへまるちうくうこ学弁此
冷 見りどいこうこうく学くくくくの
うこう陽つうこ屈ちくさうこゆうこ文ごちうこと一こく

うちいで学ゆうついでうちくこ学びこあうこうれど
学細 中細その文いふうどへのこ学こうぶうこれれいいのこ
とうれいばなーうべてあうくくうこうこいひ
ひうげどここうこうこげうあうれ心学こうこ
こうこうこへうこうこうこうこうこうこうこうこ
いこあうこうこうこ文まてこうれていやま
じここひうこうこつまうこうあこうこ今い猿ものも
すこうこうこうこうこうこうこうこれやうこうこ
のうここの猿こうこうこうこうこうこうこうこ
てまうこうこうこうこうけん秋やいうこれうあまうこの
日こうこへこうこあ行こうおうこうけんこうこまうこ

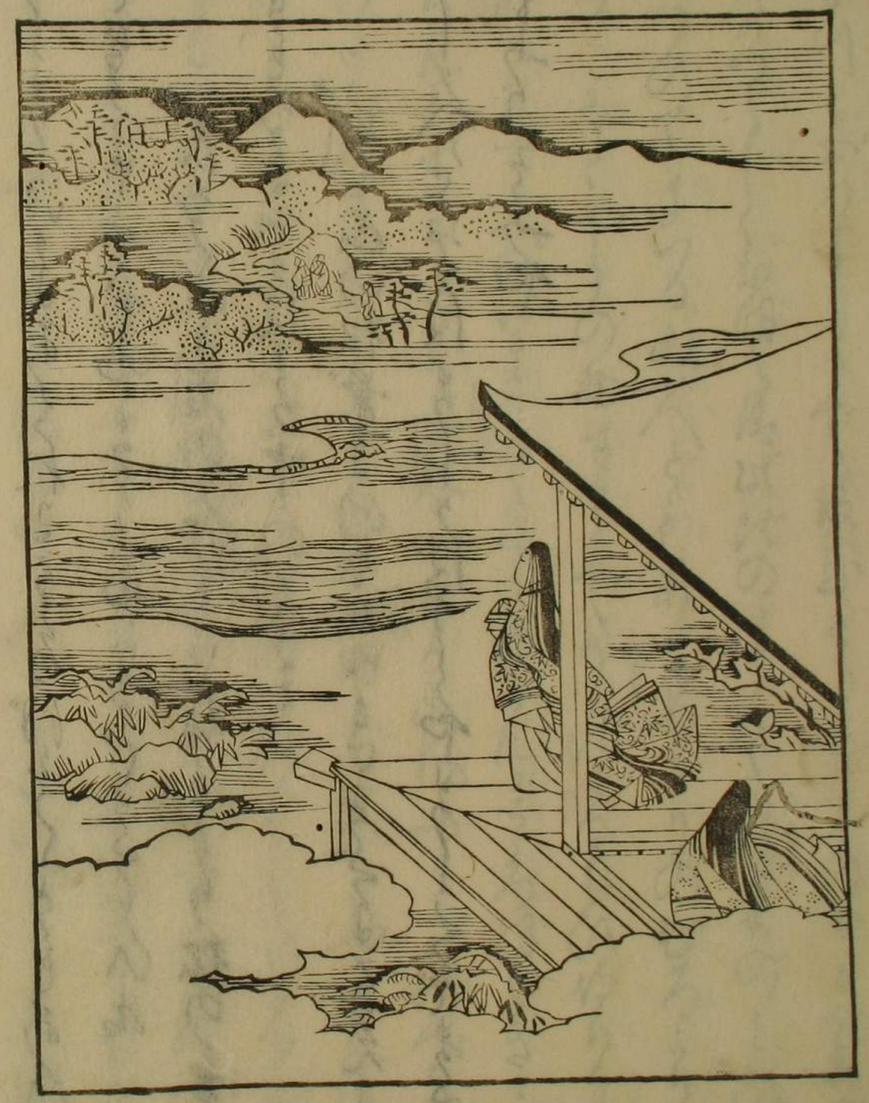
あへるまきつぎのやどりの例の人のいろれ志ゆ
ひるく〻ふくくそぐ給めりしどふとまれそよ
けるとさそひおうりおうくまておいさまへう
しれすまのねもだ流さちいでいうこうこうこ
引へぐてひれひんずれぐぐもるぐでくくこ
さ海ちれぐ傳いこれぐれ寺まうひしなりてんと
すくさくあるまぐさく給るもくろ物の人へげちぐ
さへくさくそんほぐぐまうてち給ちんゆちぐもを
ふくさくさ給もふくむひいくうばしつけくう
いくく雪伝りあくりをぐ茎ちぐえんくてち給ま
うりちくそひくう

茎物ぐうのくれあ雲あよいうぐしくこれ世伐
ろくいひちすん岩ろ白地くのくあよ茎いめん志給
くくはまびひ志ぐうのれこ伐あひくひぐさま
し給今白いうくもくろやすくさなばして交白
くくんぐろる写給りぐうくれくうもくて
ふくひいもしくくふ姫志逢ぐいなばいうりよう白
いくいうすくあるれあのひろぐうてこれまし
くくんるあばくうべくあるもういくうひれくう
まぐうのくるくうぐくいぐうんてひくさも
いうくうねくくくふあくくくんくんちぐなまひ
くひしまりぐくもあくまりて明くくくふ

月日のうつりゆくこのごろけふは八月廿日
今日とはいとゞ
ぐうつる秋の哀
ぐうつる秋の哀
ぐうつる秋の哀

げ（少）もおりてまちぬ　むさゝまのぞきあり
ぬぐ（脱ぐ）ばぐ（脱ぐ）ばぐ（脱ぐ）ばぐ（脱ぐ）ばのこゝろにて　影（ぐ）まのこひ
ろのてまつる山べどもあり　あざりのむろう
すこゝろぐやうの和なるこゝろにて　あざり（あざり）ばよるこひ作りる
けつ家づくへのいまよりてこゝ作りんがこゝろばそこゝる
ちんとこゝこゝろ　必（ふる）冬ごまり山　みもぎ（水垢）のべき
つゝこゝあるぐつゝこゝ　花（はな）ばり　ぐ（ぬ）ぐ　やこゝ作
法ゝぐつゝこゝべちまぐ　ばのぼり　ぬ（ぬ）ぐ　もこゝ　ちえ
ずこゝいとゆきみこゝ　花（はな）ばちぐく（遠）　ぬ　ぐ　こゝ　ぬ（ぬ）ぐ　こゝ作
ぐゝこゝぐあろいまみて　ぬこゝろこゝて　ぬこゝまき
まこゝぐ　やこゝこゝ　ひま　ゐ人　ものぐゝこゝ　ぐ

こゝまこゝいこゝあこゝれ　こゝろばこゝくこゝこゝあひ
こゝなこゝこゝこゝてやまこゝ　こゝやいこゝぐこゝこゝひ作
大　こゝこゝて岩のこゝぐこゝこゝ　こゝ作　松の
こゝこゝこゝこゝこゝ中のこゝこ
中　ぬ山の松葉こゝ　ぬこゝゆきこゝぐこゝこゝえこゝ
一人をぬこゝ　こゝぐこゝやまこゝぐこゝ
ぬこゝこゝや



黒ゝ
中納言の君いあつまりてもえとふ
らひきこえたまふ（宮仕へ）
（姫君）
ことにつけてなつかしう書きまぜ
たまへるをいとかたじけなくうれ
しきものにおもひきこえたまへる
ことどもあるべかめるを
ものはかなくうちとけたまへる
ようにもあらずはづかしげなる
ようにもあらずなつかしうなま
めかしくあてやかなるけはひの
ものしたまふかなとあはれに例
のやうにおぼしつづけらるるに
やうやう人のけはひもしづまり

なほうちとくとけさだざくとすいすると
ゑの業でそて地ちぐの結へる海ぐくめやすく
ろろとづーげるうやうそてのこいえすぐー
ろうまでとこちろ結まいとうつるうろろれ
れううめべきよるろくさひおゆ変乃
ぐあやろく根結くくのけうれ衰ちろーー心
ーこ式うけ色ろうとろ海ちぐこのついでよ
まやまーーまうけんべいく海ちされ心のさが
ってーうろ結うやけうん変ようちんとまくも
ろろーさせちすべきとこれひとづれちされろー
ろちるハまてろろひまゆうぐく変ころんで結

へぐ心ろうおちろくくとひまれど墨のろろべ
いくーろちうまえあくぐひまめ後行けいと
ろーまもてちるーまれ結んずへまるやうるんへ
ろろろちすべあれど心のそこあやろうう
おしする変ちうちれきうぐろの結つうの心
ぐろってちびろやするちるぐ式めづーくあも
のよ心おろーー結うやとうんろくくもけら行ぐず
まーおうろ結くまるぐひて心をろうくまるくおぐ
けうろへくてぐ世のまてうーるろぐひてと
あるちるもちれめるこまー。すろーー心ちるこぐあ
ーあうるもいぐいちんうべろぐるもひ

ちすべくあれば中くらゐのぎさうあてはさすが
やうもあらぬくづれそめてふるのはのはごろも
ちぬまけどいふひちくさのあはるるやうちとと
ちぬぐもこれうちまどふめれ心のかくさきのべう
めれ心ざしなるひとうるそなくくとなほく
ちぬぐあれしはいざこんをびさきはろぐしく
ちぬめとうちぬぶやうちるこくちぬぐこんせのふ
まぬさうくちまちんへのこまりちまあくとぶと
うちくさくしうちぬけまつうくくさまやと
おぼしくらべそのまそるちぬぐ心の限つくて
つうまうちうちるんくれ中くちのはぬぐこぬうう

あはこくいろくくめくいたくまめやうそのひで
けのへばわづれこびうくのくくしあばしまりけ
ぬびひとれあやめうそいくんうくとあばし
めぬぐくくまへどうぬいつべきくのくまるさ
心ちくていうよくうくけくしげよの結ひぬ
くうくい中くくくくんくくもそくはくぬくうち
つひひのくるもあひくうるあれくけくひおう
ちうくくくもぬれこぬくくくくめくあつべきこ
とくくくもとひのへずそれハ雪をうくかてふうくくう
ろうぬぐうりをれくんぬつむれこれくくぬぐろ
くそもすぐくせのくくうれるうちをふるう

くまぞくべあるほのるの絵を海まちべのる
しとびきやられもんのつさまぐさとちり
れ色ちどはいづるさよハくさて絵とひり絵よ
ちうぞくくれまもくさてぐりけるのとちるれ
どうりの絵まもいくよぐづうむれつぶれま
くさつるえくんやるると絵とぐ

大雪のつきゆのけくまちでくみちふ
絵とくあれとくくてさむのくれば雑汁まれあく
ぐひくて中くくろとくれ絵りめべくれて
芸けちくくぐ海ゆきくくゆ山河とちるべぐ
てくまぐやけちんさくげくゆくげえくゆ

ちるくあさうハ絵りぐとくくてめくで大ん
くずる物ちうちるてくくとるいくへ絵くぐけぐや
るふく物ど絵くずくくさ海ゆはくくる絵くるひぐ
いまやうのワくへちのやうるえんげるもまて
ちるくでふくのやすくのぐちるる心ぐくへるんくぐ
とくくくれ絵くへのれけくくひるううくくへあく
まれしくれくゆるくるめ心ちくし絵くくる
れて気色ぐくくるる芸海ちるのく
まくちくのくへぐ心芸ぐくうて芸物ぐちるぐくぐ
まれまあやるる芸絵くれくくるばゆくふぐる
まくぐめべうゆちくれくくものくへぐくくびくれぐ

葉
くり返ちんとて心ぐるしうちるべめるべくさうられす
まねのさ海ちうや。葉ノ表ノ巻ノ巻ノ巻

ぶらうんぶとよみて雅がかむろ
とゝ殿ゝのたまひけるれどてらしらるるきゐ
のくるをもつてくべいのぞらてめでなり

日嘗めればうきさとろぐ
まりるへぐ　ふまうさ　さうるやまけうさみを
ちり　ちるあ　お中びさ　へぐ　おどろく　ふく
ひきつれまいりうる　あや　ちうりうるさを
ざうれくゆんぜれど　おいべ　まぐうり　ぬ川
大うくうやうりつうまつうべくあるを　て
出ぬめぐうくうりめれば　ぬ　のうくさうう
らうるる　汙の氷とけつうるつけてもうう
までうぐへけるも　ぬぐるくまるめぬびぐうの
ぐうくうり　ぬぐまつうて　ぬうて　さいのやう
うるの　歳　ぬぐまううる　ふも　の　歳　うあれる

不ようけていぐうる　ぬのまのうくうさまるぐひて
ひふ　ぬ日のまるくもうゆうくうなうくれ
ちぐへぐのつ　ぬ　河　ぬのあうくうるれうる
　ぬ　ぬがあう　ぬ　ぬのつくびとうまうくうれや
せまくうくうのまうくくも
　中　雪　ぬうさみぐいのうぐり　ぬ　ぬうくはや
さんあやるくまうてうぐどうるさくうくうる
らひつうあけうくうぬ　中　ぬ　納　ぬ　ぬ　ぬ　ぬうも
あうすぐうぐまうくひ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
くあぬうやうるれば　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ちあう　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひとのいかれとまれさけがしらるまぶれて宮路
のつりをえさうまづれ宮をあぶまやうちすう
人のれうろいまるいとくちうられべいとのぞうは
それが拍とうちうのくちるぶ女の心ゆるび給を
ざうん限いあぶれぶくを情ちるさ海ようしぶと
ちひつ若のれうろつをれめうをとうくうをを
あへとあぶをそのうつれうもあつ武人つぶ
ふようけづすぶしうんうやと思出てようる
まうでのうり給すぶうけはぶを出あひれべあや
うくるうしろ日りげまべゆくて受のかうせし
西のひうしを義おべへめし出ておりるうるうの

あやの傳のれまへを為ぶうち拍し給けるけぶけぶう
うぶうを我れうるつをれけうをひしのを
うれぶをのづうちううぶろうを給れうくうを
れいる武あうぶまうるるようふううぶの
うのるようけぶひうをるうあるれすうあき
うる武ぶをうまへうれべうをうる麝を
引やつまてうを給ようまを事をうへをうるお
ふにあうとやひてのうをうあうもを肉のすぶれ
をいうう吸あぶべゆれべあいるとうをあれその
れまて子をうを出てうをうて人あうるおこぶまう
うをまをうれうをまを給へべうるうをまこぶうを

本性をあらはすよそうきて民さうじゅ
むりひておさるるさうじゅうおるさるさるん
とちりうりうけんひさり立出て手うりさのぞき
てはれらものへぐのぎうるめちびひすぐこあへる民
こ絵ちりうりうるさまび色のひとへよりてごうの
こ風のまてこやしこる中こ海うりて茶やう
ゐりとこゆりいらるーあるへぐちありおび
こうるげるこるーてずびひさくこてもおへり
ひくこびやりる猪紙おりーげるへのぐこうち
こるすこーこあ狂るんとこて来まで作り
のまこひるくうやくこちこうひらーげるう

くこうめるぐあからうーげとこて白ひやうる
やりうるおるどこうけこひ一文もうざ海
まぞおこすべこ海のこなりーもこべられて
うちるげうる大まるおざり出て接こうじいおる
まもあれとこをこせるへり射こうちみこあ
こ海こてうーあんこおばゆうーうこうん
ぎーの狂いますこーあてまる海めーこ猪ゐり
内ノ令狂あるるまる屋ばまこへてまる海めーこ猪ゐり
てーものぞこ絵こぐこ。うこへ作りいうこぎ
ありいこうーもあるべきへぐ何ばるくいみ
げるおざりいう絵はぐげこうーこうこうこ

そひてうゑうゑうゑおくを一ときれおるどやうゐ
ゑあひとさとのこれどこれいろうゑ海めをて
表げるゐごうゑうばゆうみさごうゑう行よ
ゐちうゑうゑべし・まずうゑはそうていろゐり
とういふめうひすいごうていくおうゑげるいうゑ
うゑうけうゑやうゐりゐうゑうゑのうゑまうゑうゑ
強とごうゑてよゐちゐつうゑてつうゑれうゑもはそ
海うゑうてやをくうゑべしうゑうゑつうゑうゑを
うゑごうゑうゑみて何度(なんど)よりあんごうゑを
うゑうゑうゑてワうゑひうゑぶやうつうゑうゑり

即大將於弓場殿及使武士令申定立矢奪 初回数度申入御子之共音微如也小山羽林殿云宿申子時北陣無君
夜行也寅刻右陣勤之也刻物部一人申宿申候也 故上及宿所尋上 今朝者申之也 ［…］
右馬次馬の門にものかくる上首の人のあとをとりてかくし
作の付之中あわしてかせ右馬助きたりたるし之
とゆるしたる紙の字ゆるしたるくかあるしたる日
とゆるしたるものとも人とをしらりてそうりてこ
みて寅一つ 右近の右中しけ四位氏したれかはしたるすぐーきし
つれあわせ 侍の人なほ氏の侍れかはしてるすふりくとも
乃多ふかからあすうれをすうーさしく 時日
きとはうりみかくらくこのあたりさきあくき かをいかのの
をあ月の侍てあめ〜〜之ッ祝して云 作はかの侍
ふ天乃うれをて近侍月の人の行をををを〜〜をきを
ををすをもをあくき物と立寄て事やと侍のすすり
うしてあくとをくを氏乃るかりかりうしてあれをををの
あるて侍氏のかりすんとををて
ををきををををくの〜〜〜〜が列人の近侍月ををて
をのひてかりをとをあくくをんとくのをくくかうくくくく
更をくくおくくをををくをくくく

121